

子育ての苦労意識に影響を与える要因

～札幌市・釧路市・白糠町におけるアンケート調査の分析～

大垣直明* 大友彩加**

はじめに

私事になるが、横浜に次女が住んでおり、7歳と4歳の2人のこどもを育てている。その娘から毎朝のように家内に電話がかかってくる。子育て上の様々な問題や不満をぶちまけてくるのである。それが、結構長時間にわたることがあり、いい加減に終わらなさいと忠言することしばしばである。母親が近くにいないので仕方はないかとも考えているが、それが育児ストレスの解消にずいぶん役立っているようだ。そんなことで、近年になって「子育て支援」に関心を寄せるようになった。

一昨年3月、北海道工業大学を定年退職し、引き続いて本学人間生活学科に勤務する機会を得た。それと同時に、5名の卒論学生をもつことになり、それぞれの学生と卒論のテーマの議論に入った。そのうちの一人に大友彩加がいた。彼女は子育て支援に関する調査を実施し、卒論にまとめたいという。丁度、2人の問題意識が一致したのである。

7～8月にかけて、「子育て」環境に関するアンケート票を完成させ、9月に札幌市手稲区、釧路市、白糠町の幼稚園・保育園に子どもを預けている母親に対してアンケート票を配付・回収した。札幌市手稲区は大垣自身が幼稚園・保育園と関わりがあったので、スムーズに調査を終えることができた。釧路市は大友の出身地であり、白糠町は彼女の祖母が住んでいるということもあり調査対象地にしたが、彼女自身が直接両地区に入り、苦労して調査を終了させた。彼女はその調査をもとに「北海道における子育て環境～札幌市・釧路市・白糠町アンケート調査から子育ての現状を知る～」というテーマで卒業論文を仕上げた。

興味深い調査結果が得られていたので、いつか整理して何かに投稿したいと考えているうちに、1年が経過した。そんな折り、本学科の研究紀要である「人間生活学研究」の原稿締め切りに間に合うということを知り、急遽、本稿を取りまとめた。

* 藤女子大学人間生活学部人間生活学科・教授

** (株) 片山鉄建

1. 研究の背景・目的と方法

1-1 研究の背景

高度経済成長期（1960～1975年）以前の地域社会は地域的地縁関係にもとづくコミュニティが成立しており、緊密な人間関係が形成され、住民間の相互扶助の仕組みが機能していた。その中で、子育ては母親1人ではなく、兄弟（上の子が下の子の面倒を見る）、祖母や近隣の人々により支えられていた。

1960年代（昭和30代半ば）から始まる高度経済成長期を経て、わが国の地域構造は大きく変化した。重化学工業を中心とした工業地域（コンビナート）が大都市周辺に集約され、多量の雇用機会が発生した。それを背景に、地方から多くの若い技術者が大都市周辺に移り住んだ。1960～1975年の15年間で実に1533万人が東京・大阪・名古屋圏に流入し、太平洋ベルト地帯と称されるまでの人口集中をもたらした。その結果、かつて存在した地縁関係にもとづく地域コミュニティは崩壊し、大都市と地方との間に大きな地域格差（過疎過密）を生んだ。大都市周辺には農地が住宅地に転用され（1950年に300万戸あった専業農家は1970年には85万戸に激減した）、巨大なニュータウンが各地に建設された。

その過程で、核家族化や世代間の分断が進行し、子育て環境も大きく変化してきている。もともと、子育ては母親の仕事というわが国の伝統的な考え方が根強いことに加えて、父親の時間的制約がそれに拍車をかけた。父親は企業戦士として働きつめで、子どもが寝ているうちに出勤し、寝てしまってから帰宅することもごく普通のこととして取りざたされていた。その結果、子育ては母親まかせになり、母親は仕事を辞めるか、出産を遅らせるか縮小して子育てにあたる傾向にある。2006年度の国民生活白書によると、20代後半の未婚女性の就労率は93.3%であるのに対して、同年齢の既婚で子どものいない女性の就業率は74.9%とやや下がるが、子どものいる女性は38.3%に急落する。この事実は就労と子育ての両立の厳しさを物語っている。

さらに、核家族化の進行によって自分の母親と遠く離れているケースも多く、近くに相談する相手や友だち（ママ友）もいない場合、独りで悩み、育児ノイローゼやストレスが積層し、やがて児童虐待、育児放棄に陥る深刻で不幸な事件が日常的に報告されている。

1-2 研究の目的

- 1) 若い母親が子育てに苦勞している実態を把握する。
- 2) 子育ての苦勞意識の増減にどのような要因が絡んでいるかを明らかにする。
子育ての苦勞意識に影響を与える要因として、①基本的要因（妻の就労状況、子ども数、住宅の規模など）、②人的要因（夫の有無、夫の家事協力度、妻の母親の居住地、ママ友の有無とつきあいの程度、近所の人々の支援など）を想定している。
- 3) 地域における子育て環境を評価する
- 4) 子育て環境のあり方を考察する

1-3 研究の方法

研究目的を達成するために、札幌市・釧路市・釧路町の幼稚園・保育園に子どもを預けている母親に対してアンケート調査を実施した。アンケートの配付・回収方法は、①団体による委託配付・回収（札幌市幼稚園・保育園）、②団体による委託配付・郵送回収（釧路

市幼稚園、白糠町幼稚園・保育園）、直接配付・郵送回収（釧路市保育園）の3方法で行い、2009年8～9月に実施した。配付・回収状況を表-1に示すが、3都市6団体の母親355人に配付し、205票回収した（回収率57.8%）。

調査内容は、1) 基本的事項（妻の年齢、就業状況、子どもの人数と年齢、住宅形式と部屋数、母親の居住地）、2) 地域の子育て環境（子育て手支援センターの利用度、地域環境の評価、子育ての苦労意識とその理由、近所の支援の有無）、3) ママ友について（ママ友の数、知り合ったきっかけ、ママ友との交流頻度と交流内容）、4) 夫の家事協力度、育児休暇について などである。

表-1 アンケートの配付・回収状況

調査対象		配付数	回収数	回収率
札幌市	幼稚園	60	42	70.0%
	保育園	60	57	95.0%
釧路市	幼稚園	100	41	41.0%
	保育園	70	32	45.7%
白糠町	幼稚園	35	21	60.0%
	保育園	30	12	40.0%
合計		355	205	57.8%

1-4 今回調査した子育て世帯の状況

1) 妻の就労状況

今回調査を実施した対象は幼稚園・保育園に子どもを預けている家庭であり、妻が無職である比率は39.6%である。有職者のうち正社員（正規雇用）は25.7%であり、パート・アルバイト（パートが大半）が34.6%となっている（表-2、表側）。

2) 妻の年齢分布

妻の年齢分布は、20代16.4%、30代前半29.9%、30代後半35.8%、40代以上17.9%と幅広く分布している

（同）。30代後半以上が半数を超えており、育児年齢の高齢化の傾向が伺える。

3) 子ども数

子ども数の分布を表-2に示している。子ども数の分布は1人13.6%、2人50.2%、3人23.2%、4人以上3.9%となっており、平均で2.08人である。

表-2 妻の年齢・就労状況×子どもの人数 (%)

		1人	2人	3人	4人以上	平均値(人)
妻の年齢	29歳未満(16.4%)	42.4	48.5	8.1	0.0	1.67
	30～35歳未満(29.9%)	28.3	46.7	21.7	3.3	2.00
	35～40歳未満(35.8%)	8.3	62.5	25.0	4.2	2.25
	40歳以上(17.9%)	22.2	38.9	30.6	8.3	2.25
妻の就労状況	正社員(25.7%)	28.8	51.9	17.3	1.9	1.92
	アルバイト・パート(34.6%)	28.6	44.3	22.9	4.3	2.07
	無職(39.6%)	13.8	55.0	26.3	5.0	2.23
合計		13.6	50.2	23.2	3.9	2.08

妻の年齢との関係を見ると、20代の若い母親は1～2人に集中している（90.9%、平均で1.67人）が、高齢になるほど人数は増え、40歳以上では1人が減り3人が増えるため、平均値も2.25人に上昇する。妻の就労状況との関係で見ると、仕事をもっているほど子ども数が少なく（平均値1.92～2.07人）、無職ほどやや多くなっている（同2.23人）。

4) 住宅（住宅種別、住宅規模）

住んでいる住宅の状況を表-3に示している。住戸形式は戸建54.2%に対し、共同建が

やや少ない 45.8%である。妻の年齢との関係でみると、40 歳以上になると戸建が 72.2%に急増しているのが特徴である。LDK以外の部屋数は、2～5 室にかけて幅広く分布している。20 代の若い世帯は 1～2 室が 45.4%と部屋数が少ない（平均で 3.09 室）が、高齢になるほど 3～4 室のウエイトが高くなっており、30 代後半で 61.2%、40 歳以上で 72.2%となっている。これは長子の年齢と関係しており、特に 40 歳以上では長子年齢が 10 歳以上が 53.2%をしめており、長子に個室を与えることがその直接的背景となっていると考えられる。

表-3 妻の年齢×住宅条件

		住戸形式		LDK以外の部屋数（室）					平均部屋数（室）
		戸建	共同建	1室	2室	3室	4室	5室以上	
妻の年齢	29歳未満	54.2	45.8	3.0	42.4	21.2	18.2	15.1	3.09
	30～35歳未満	48.9	51.7	1.7	28.3	33.3	18.3	18.4	3.28
	35～40歳未満	56.9	43.1	1.4	25.0	30.6	30.6	12.5	3.31
	40歳以上	72.2	27.8	0.0	22.2	38.9	33.3	5.6	3.22
合計		54.2	45.8	1.5	28.4	31.3	25.4	13.4	3.25

2. 子育ての苦労意識とその理由

2-1 子育ての苦労意識

子育ての苦労意識を「非常に苦労している」「少し苦労している」「特にそう思わない」の3段階で聞いている（表-4、左）。「非常に苦労している」が 4.5%、「少し苦労している」が 41.3%で、あわせて苦労層が 45.8%をしめる。これに対し、「特にそう思わない」（非苦労層）は 54.2%であり、苦労層をやや上回る。妻の年齢別には苦労意識に大差はない。同様にデータは示していないが、調査対象都市別に見ても大差はない。

2) 苦労の理由

苦労している理由について6項目をあげ、回答を求めた（表-4、右：複数回答）。子育ての苦労の理由として、「自分の時間が取れない」（50.0%）、「肉体的に疲れる」（36.2%）、「子どもがいうことをきかない」（34.0%）が上位をしめており、これは妻の年齢別にみても同様の傾向をもっている。このことから子どもとの対応に疲れ、自分の時間がもてない若い母親像を描くことができる。これは、後述するが、多くの場合母親（妻）が中心となって子育てをしており、夫や自分の母親などの直接的支援が受けられない場合には、苦労意識は一層厳しいものになる。

表-4 妻の年齢×子育ての苦労意識・苦労している理由

		子育ての苦労意識（%）			苦労している理由（複数回答）（%）					
		非常に苦労している	少し苦労している	特に苦労していない	自分の時間が取れない	相談する人がいない	家族の手助けが少ない	肉体的に疲れる	子どもがきかない	育て方がわからない
妻の年齢	29歳未満	6.1	39.4	54.5	46.7	6.7	13.3	40.0	40.0	6.7
	30～35歳未満	8.3	31.7	60.0	58.3	8.3	25.0	29.2	33.3	8.3
	35～40歳未満	0.0	50.0	50.0	44.7	7.9	21.1	36.8	26.3	5.3
	40歳以上	5.6	41.7	52.8	52.9	11.8	11.8	41.2	47.1	11.8
合計		4.5	41.3	54.2	50.0	8.5	19.1	36.2	34.0	7.4

3) 子育て環境で気になっていること

自分の住んでいる地域環境で子育て上で気になる事項を9つあげ、上位3つ以内で回答させた。その結果を表-5に示す。全体的には、「子どもの友人が周りにいない」(34.5%)、「近所に親しい友人がいない」(30.4%)、「近所づきあいが少ない」(24.9)と人間関係に関わる事項が上位をしめた。上位3つを選ばせたので、物理的環境(ハード面)より人間関係(ソフト面)を重視していることが伺える。

都市ごとにみると、物理的な環境要因に大きな差が生じた。それは「緊急対応できる病院が近くにない」と「整備された公園がない」の2項目に対して、白糠町では61.5%と42.3%の高い数値を示し、他都市との間に大きな差がみられた。これは都市規模により、病院や公園等の施設整備に差があることを反映している。逆に大都市ほど高い比率を示したものに「治安が悪い」があげられる。

表-5 調査地×子育て環境で気になること(複数回答:上位3項目まで)

調査地	近所に友人がいない	子供の友人が周りにいない	近所づきあいが少ない	交通の便が悪い	整備された公園がない	治安が悪い	支援者が周りにいない	緊急対応できる病院がない	子育ての地域支援がない	その他
札幌市	30.6	34.1	22.4	17.6	16.5	20.0	20.0	15.3	8.2	14.1
釧路市	32.9	34.3	32.9	12.3	25.7	11.4	17.1	11.4	12.9	11.4
白糠町	23.1	42.3	11.5	11.5	42.3	0.0	15.4	61.5	0.0	3.8
合計	30.4	35.4	24.9	14.9	23.8	13.8	18.2	20.4	8.8	11.6

4) 自由記述による「子育て上の悩み・要望」

自由記述欄に記載された「子育て上の悩み・要望」を整理したのが表-6である。205票の回収票に68件(33.2%)の記載が寄せられ。その中で特に注目される意見として「子どもが病気の時、会社を休まざるを得ない」「子どもの病気や用事がある時、気楽に子どもを預けられる施設がほしい」といった仕事と子育ての両立の難しさを読み取ることができる。以下に具体的ないくつかの記述を紹介する。

表-6 自由記述による子育て上の悩み・要望(回答数68)

<p>〈人間関係〉計26</p> <p>1) 夫: 意見が合わない (2) / 夫の帰宅が遅い (3) / 何もしてくれない (1)</p> <p>2) 子ども: しつけ方やケンカなど大変 (10)</p> <p>3) 自分: 時間がない (3) / 孤独感 (1)</p> <p>4) 近くに相談相手がいない (5)</p> <p>5) 近所とのトラブル (1)</p> <p>〈仕事関係〉計5</p> <p>・ 子どもが病気の時、会社を休まざるを得ない (4)</p> <p>・ 安定した収入と子どもとの時間が十分取れる仕事があれば (1)</p> <p>〈保育所関係〉計21</p> <p>1) 子どもの病気や用事がある時、気楽に預けられる施設がほしい (12)</p> <p>2) 共働きでなくても保育所に預けられるようにしてほしい (4)</p> <p>3) 保育所の増設や待機児童問題の解決 (5)</p> <p>〈経済関係〉計8</p> <p>・ 保育料が高い (4) / 医療費を安く (1) / 子供手当を早くほしい (3)</p> <p>〈施設関係〉計11</p> <p>・ 病院の充実 (2) / 公園の整備 (6) / スーパーのトイレの改善 (1) / 支援センター(2)</p>

- 主人は仕事が忙しく家にほとんど居ません。家族揃っての朝食、夕食を週に一度とれるかどうか。こういった家族はうちだけではないと思います（40歳）。
- パートに出ているので子どもが急病の時など仕事を休まなければならない時が非常に困ります。仕事中に保育園から連絡をもらっても急には帰れないし、あまり頻繁に休んではパートも続けられません。預かってもらえる施設もありますが、少し高額（1日3千円）で利用できていません（37歳）。
- 私は育児休暇よりも普段の仕事を終えて帰宅する時間を早くしてほしいです。家族全員で夕食を平日でも食べたいです。それってぜひたくでしょうか？（34歳）
- 働いている人の為ばかり考えて保育園不足を解消しようという動きには、メンタルな部分を言えば働いている人は勤務中は子供と離れる時間がある分、専業主婦で、周りの手を借りず子育てしている人よりは、追いつめられる事が少ないかと。例えば有休を取り遊びに出かける時も仕事だといつわれば保育園も預ってくれ、1人で外出し息抜きできますが、主婦だとそうもいきません。気軽に安価で短時間でも預けられる場所の整備をした方が虐待も減る様な気がします（35歳）。
- 3才になればもう楽ですが、0~2才の頃、近所に知り合いがいなく（夫の転勤により0才の時初めての土地で子育てをしていた）、自分が熱を出した時、誰も助けてもらえる人がいなく、とても大変だったトラウマで、一人っ子でよいと思うようになってしまったこと。そんな時、気軽に助けてもらえる制度があればよいと思った（33歳）。
- 子育てをされていて何が一番大変かという（私の場合釧路に実家がないので）気楽に子供を預ってもらう先がないことです。子供のどちらかが具合が悪くて病院へ行かなくてはいけない時（点滴などで長くなりそう）。子供（上の子）の行事で、一番チョロチョロして大変な時期の下の子を連れての参加。自分が本当に体調を崩した時など（つわりで大変な時も辛かったです）。我家は今は6才4才になり大変な時期を脱しましたが、2才0才~4才2才頃までは本当に大変でした。幸いにも仲の良い友人に預ってもらったり、頻繁になって気が引ける時には、託児所を利用しました。夫は職种的に、有給をとったり抜け出してくるということは簡単にできず帰りも遅いので全くあてにはできませんでした（悪い意味ではなく）。こんな時に近くに両親がいて預かっている人を見るとうらやましかったです。ただ近くにいっても働いてたり病気だったりすると無理なのですが。今、もう1人子供が欲しいなあと思いますが、少々ためらいもあります（34歳）。
- 子が病気したときに、仕事を休まなくてはならないことがこまります。病気の時に、預けられる施設があると便利なのですが、そういう施設がありません（42歳）。
- 主人の育児に対する考えがちがうので、苦勞しています（30歳）。
- 保育園なども共働きじゃなくても入れる様にしてもらえれば子育てももっと楽になると思います（40歳）。
- 年に合ったしかり方がわからない（32歳）。
- 「自分の時間」をつくる難しさを感じています（39歳）。
- 転勤族は、新しい土地に行くたびに、人との交流を持ちづらくなっています。子どもが小さいうちは幼稚園など同世代との交流の場が自然ともうけられますが、子どもの成長と共に話しの出来る交流の場を積極的に自分でみつけないと、孤立してしまうのはさびしいですね（35歳）。

3. 苦労意識に与える要因

子育ての苦労意識を「非常に苦労している」「少し苦労している」「特に苦労していない」の3レベルで聞いている。ここで前2者をあわせて苦労層、後者を非苦労層と表現する。

3-1 基本的要因

1) 妻の就労状況

妻の就労状況と子育ての苦労意識の関係をみると(図-1)、「無職」、「正社員」、「パート・アルバイト」(大半がパートである)の順で苦労意識が低くなっている。正社員よりパート・アルバイトの方が苦労意識が高いのは、就業条件の厳しさを反映していると考えられる。

2) 子ども数

子ども数も子育ての苦労意識に直接影響を与えており、1人の場合苦労層が28.3%に過ぎないのに対して、3人以上の場合は56.4%に倍増する(図-2)。4人以上に限定すると、その値は87.5%にまで上昇する。

3) 住宅条件

〈住戸形式〉

今回の調査対象のうち、戸建居住者は54.6%に対して共同住宅居住者は45.4%とやや少ないが、2つの住戸形式間で子育ての苦労意識の差はない(図-3)。

〈LDK以外の部屋数〉

住宅の規模をLDK以外の部屋数でみると、部屋数が増加するほど苦労意識は低下する傾向にある(図-4)。部屋数が少ないと収納空間も少なくなり、室内に家具やおもちゃなどが溢れ、部屋の整理に精神的物理的苦労が増すと考えられる。

3-2 人的要因

妻の子育てには夫、母親、ママ友、近所の人などの支援が必要である。この節では、これらの人的支援と子育ての苦労意識の関係を考察する。

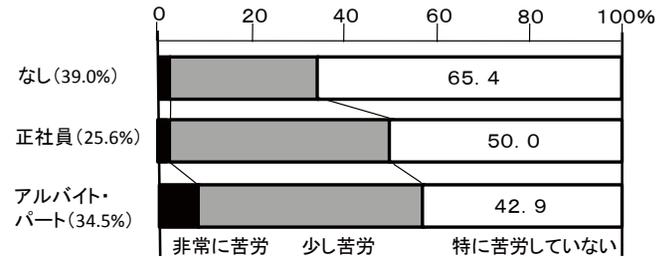


図-1 仕事の有無×子育ての苦労意識

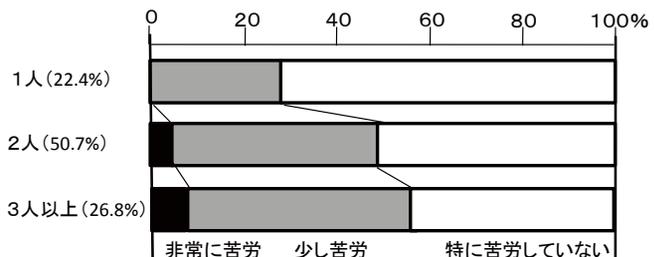


図-2 子どもの人数×子育ての苦労意識

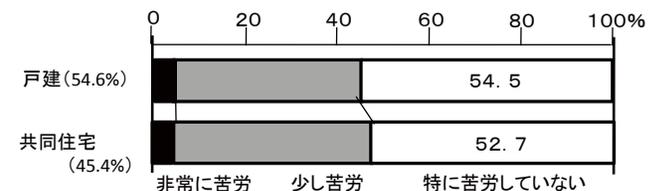


図-3 住居形態×子育ての苦労意識

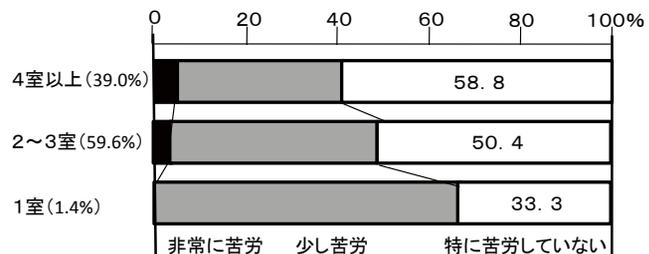


図-4 LDK以外の部屋数×子育ての苦労意識

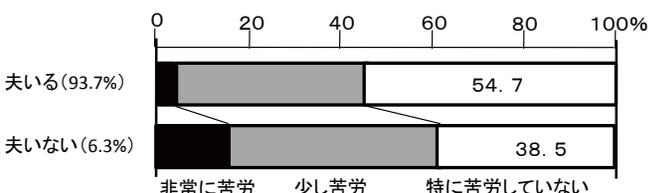


図-5 夫の有無×子育ての苦労意識

1) 夫の有無

今回の調査対象 205 人のうち、夫がいない世帯が 13 世帯 (6.3%) 存在した。夫は子育て上きわめて重要な役割を果たすと考えられる。図-5 に夫の有無別の子育て苦労意識を示しているが、夫いないと苦労層が 61.5% (そのうち「非常に苦労している」は 15.4%) を占め、夫のいる世帯と大きな差を生じている。夫の有無別の詳細分析は 3-3 で扱う。

2) 夫の家事協力度

夫が家事をどの程度分担しているかを表-7 の表頭にあげた 11 項目ごとに「よく行っている」「時々行っている」「あまり行わない」の 3 段階のグレードで質問した。表-7 は妻の就労状況別の夫の家事分担における「よく行っている」比率を示している。

夫がよく行っている家事は「子どもと遊ぶ」が 68.4% と最も高く、あまり行わない比率は 7.5% に過ぎない。次いで、「ゴミを出す」(37.6%/37.1%)、「おむつの交換」(32.2%/37.6%) と続くが、あまり行わない比率と逆転している。よく行う比率が低いのは「トイレの掃除」(4.0%/86.8%)、「洗濯をする」(11.9%/63.6%) であり、夫はほとんどこれらの家事を分担していない。このように、夫は総じて家事分担に積極的ではない。

これを妻の就労状況との関係で見ると、大きく差が生じている。妻が正社員である場合には全ての家事で夫の協力度合いが高いが、無職(専業主婦)の場合には最も低くなっている。正社員の場合、よく行う比率は「子どもと遊ぶ」(68.9%)、「ゴミを出す」(57.8%)、「おむつの交換」(50.4%) で高く、全体に低かった「洗濯をする」(27.3%/45.5%) も半数以上が手がけている。正社員で夫の家事分担が多いのは、妻が有職者であることに対する夫の理解の高さを反映していると考えられる。

表-7 妻の就労状況×夫の家事分担(「よく行う」比率)

(%)

妻の就労状況	食事をつくる	食器を洗う	食事の配膳	掃除機をかける	トイレの掃除	子どもの送り迎え	子どもと遊ぶ	おむつの交換	洗濯をする	ゴミを出す	お風呂掃除
正社員	20.5	29.5	27.3	31.8	9.3	33.3	68.9	50.4	27.3	57.8	34.1
アルバイトパート	14.2	24.1	24.1	11.1	3.7	33.3	71.7	28.6	9.3	29.6	20.4
無職	10.3	9.0	14.1	10.3	1.3	20.5	65.8	24.6	5.1	31.6	13.9
合計	14.2	18.8	20.5	15.9	4.0	27.7	68.4	32.2	11.9	37.6	20.4

注) 「夫のいない」家庭のデータは除いている

次に図-6 に夫の家事協力度別の子育て苦労意識の分布を示している。ここで、夫の家事協力度は表-7 の表頭に掲げる 11 項目の家事について、それぞれ「よく行う」に 3 点、「時々行う」に 2 点、「あまり行わない」に 1 点を与え、11 項目の合計点で評価している(全てよく行う場合は 33 点、全てあまり行わない場合は 11 点となる)。ここで、11~13 点をとても

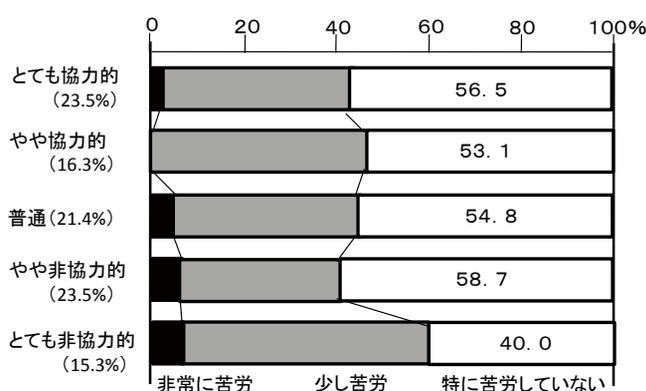


図-6 夫の家事協力度×子育ての苦労意識

非協力的、14～16点をやや非協力的、17～19点を普通、20～22点をやや協力的、23点以上をととても協力的とした。

夫の協力度と子育て苦勞意識との関係を見ると、「とても非協力的」の場合のみ、子育て苦勞意識は増加する傾向にある。

夫の協力点数11～13点は2点以内の加算であり、11項目の家事のうち1項目のみ「よく行う」か2項目についてのみ「時々行う」の場合であり、基本的には家事分担を全くしないに等しい。この場合、「非常に苦勞する」意識も6.7%に増加している(平均で4.1%)。

3) 母親の居住地との関係

妻の母親がどこに住んでいるかも、子育ての苦勞意識に大きな影響を与えると考えられる。それは妻にとって一番気楽に相談し、直接支援を依頼しやすい存在であるからである。今回の対象は、同居(9.8%)、同一市町村内・近郊(58.0%)、道内(20.0%)、道外(8.3%)、死亡(3.9%)であり、比較的近距离(すぐにとんで来てくれる距離)に住んでいるケースが7割近くに上る。

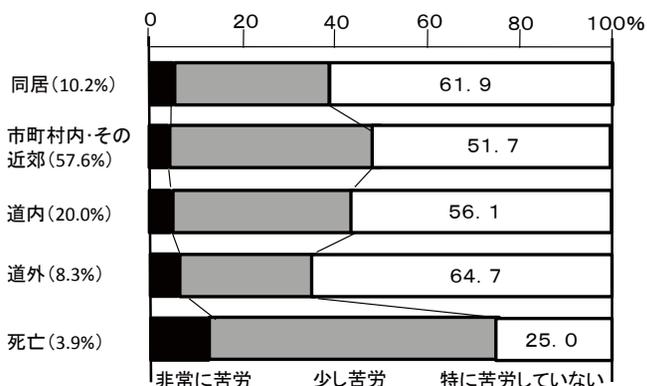


図-7 母親の居住地×子育ての苦勞意識

母親の居住地と苦勞意識の関係を図-7に示しているが、死亡しているケースのみ苦勞意識が急激に高くなっている(苦勞層が75.0%にのぼる)。これは実の母親から物理的支援だけでなく精神的支援も受けることができないことが起因していると考えられる。母親が死亡している以外では、母親の居住地の近い遠いに苦勞意識が大きく影響を受けていない。これは、交通の発達、携帯電話やメールの発達により、遠方でも容易に相談・情報・支援を受けることができることに依っていると考えられる。

4) ママ友との交流

通常、若い母親は「ママ友」と呼ばれる子育てをしている友達をもっており、日常的に交流している。今回の調査結果では大半の母親は数名のママ友をもっている(全くいないケースは15人、7.6%にすぎない)。

しかし、ママ友との交流頻度についてみると、頻繁に行っている人(週2～3回以上)は29.3%であるのに対して、あまり交流していない人(月1回以下)は51.8%と多くなっており、全体として積極的に交流しているとはいえない。

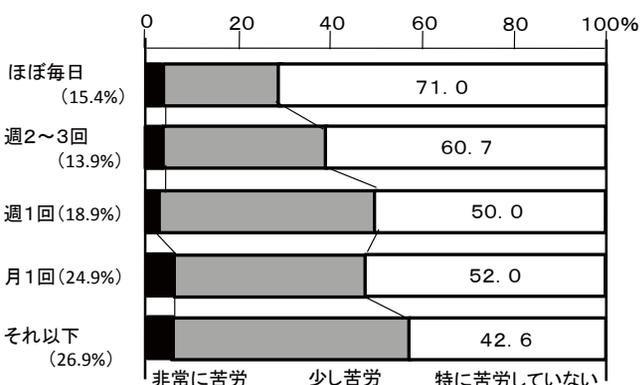


図-8 ママ友との交流頻度×子育ての苦勞意識

ママ友との交流頻度と苦勞意識の関係を図-8に示している。ママ友との交流頻度が多くなるほど子育ての苦勞意識は比例的に低下する傾向にある。そういう意味で、日常的に相談し会えるママ友の存在が大きい、約半数は積極的な交流をしていない。

5) 近所の人の支援

子育て中の若い母親と近所の人との交流程度は「よくある」14.9%、「時々ある」50.5%であるのに対して、「ほとんどない」が34.7%であり、2/3の母親は近所との交流をもっている。

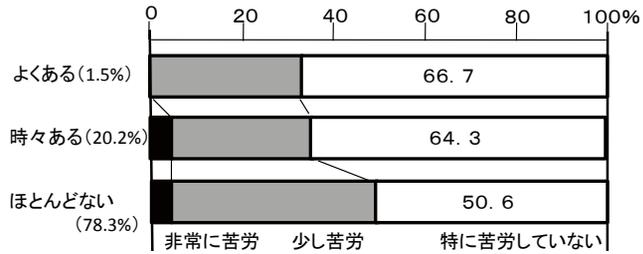


図-9 近所の人の支援×子育ての苦勞意識

しかし、近所の人から子育ての手伝いや援助をしてもらっている母親は「時々ある」(20.2%)を含めて21.7%にすぎない。図-9に近所の人からの支援状況と子育ての苦勞意識の関係を示している。この図から、何らかの支援を受けている方がやや苦勞意識が軽減する傾向にあることがわかる。

3-3 苦勞意識の詳細分析

今回の調査対象中に「夫のいない家庭」が13例含まれており、図-5で示したように「夫のいない世帯」は「いる世帯」に比べて子育ての苦勞意識が大きく増加している。そこで、この節では「夫のいない世帯」と「いる世帯」に分けて、苦勞意識に影響を与える要因についての詳細分析を行う。

1) 「夫のいない世帯」の分析

表-8に夫の有無と妻の就勞状況・妻の母親の居住地・ママ友との交流の関係を示している。「夫のいない世帯」の特徴は、妻の就勞状況でみると家計を支える必要から全員が有職であるが、パート・アルバイトが72.7%を占めており、就業条件は厳しく、そのことが苦勞意識に反映している。妻の母親の居住地についてみると、母親が死亡または遠方(道内、道外)に住んでいるケースは存在せず、同居(53.9%)か同じ市町内に住んでいる。ママ友との交流状況でみると、「夫のいる世帯」と比べて大きな差はない。

表-8 夫の有無×妻の就勞状況・妻の母親の居住地・ママ友との交流 (%)

夫の有無	妻の就勞状況			妻の母親の居住地				ママ友との交流		
	正社員	パート アルバイト	無職	同居	近距離 *1	遠方*2	死亡	頻繁に 交流*3	時々 交流*4	殆どし ない*5
夫あり (5.9%)	25.5	32.3	39.9	7.3	58.3	30.2	4.2	29.3	43.8	26.6
夫なし (94.1%)	27.3	72.7	0.0	53.8	46.2	0.0	0.0	30.8	38.5	30.8

注) 〈母親の居住地〉*1:近所～市町村内・近郊 *2:道内・道外
 〈ママ友との交流〉*3:週2～3回以上 *4:月2～3回程度 *5:1ヶ月に1度もない

表-9に「夫のいない世帯」(13事例)における苦勞意識と要因の関係を示している。非苦勞層(5名)は子ども数が少ないこと(4/5が1人:平均1.20人)に加えて、母親が同居しているケースが4/5、残り1/5は近所に住んでおり、この2つの要因が苦勞意識を引き下げている。これに対して、苦勞層(8名)は、子ども数が多い(4/8が3人以上)ことに加えて、半数の母親が同市町内に住んでおり、非苦勞層と比べると母親の日常的支援がやや受けづらい条件にある。このように、子ども数と母親の居住地は子育ての苦勞意識に直接影響を与えているが、妻の就勞状況・ママ友との交流頻度と苦勞意識の間には明確な傾向が見られなかった。

今回のデータには含まれていないが、自由記述に「母子家庭のため、仕事で朝から晩まで家を空けるので、子供が仲良くしている友達の親とも交流がもてない。家に呼んで遊ばせてあげたり出来なく、子供にはかわいそうだと思ひ悩みます。」という深刻な記述も見られ、夫と作業分担ができないことによる時間的不足・余裕のなさが物理的・精神的苦痛を与えていることが推測される。

表-9 「夫のいない世帯」における苦労意識と要因の関係

	妻の就労状況	子ども数	ママ友との交流	母親の居住地
非苦労層 (5)	パート：4/4 (1例不明) 無職：0/5	1人：4/5 2人：1/5	頻繁：1/5 時々：2/5 なし：2/5	同居：4/5 近所：1/5 市内：0/5
苦労層 (8)	正社員：3/8 パート：5/8 無職：0/8	1人：0/8 2人：4/8 3人：2/8 4人：2/8	頻繁：3/8 時々：3/8 なし：2/8	同居：3/8 近所：1/8 市内：4/8

2) 「夫のいる世帯」の分析

表-10 (次頁) に「夫のいる世帯」(192 事例) における子育て苦労意識 (3 段階) 別の各要因の分布状況を示している。

「非常に苦労している」層に影響を与えている要因として妻の就業状況(「パート」の比率が高い: 71.2%)、子どもの数(「1人」のケースがなく、「4人以上」が多い: 14.3%)、夫の家事協力度(「少ない」が多い: 50.0%)、母親の居住地(「同居」がなく、「死亡」が14.3%)、ママ友との交流頻度(「頻繁」が少ない: 14.3%) があげられる。逆に、「特に苦労していない」層に影響を与えている要因として妻の就業状況(「無職」の比率が高い: 50.5%)、子どもの数(「1人」が多く「4人以上」が少ない: 27.6%、1.0%)、夫の家事協力度(「少ない」が少なく、「多い」が多い: 24.0%、37.0%)、母親の居住地(「同居」が多く、「死亡」が少ない: 8.6%、1.9%)、ママ友との交流頻度(「頻繁」が多い: 37.3%) が関わっている。

このように、苦労層と非苦労層では同じ要因がそれぞれ逆に働いており、かつそれらの要因が複合して作用していると考えられる。人的条件の3要因(夫の協力度・母親の居住地・ママ友との交流頻度)が複合した場合の苦労意識の変動について表-11に示している。

「夫のいる世帯」の苦労意識の分布(平均)は、非常に苦労する 3.6%、少し苦労する 42.0%、特に苦労していない 54.7%である。苦労低減要因数±0(苦労意識に作用する要因がないかまたは同数)の場合はほぼ平均の苦労意識の分布に近い。要因数がプラスに増加すると苦労意識は低減され、逆にマイナスに転じると苦労意識は増加することが理解できる。この結果、要因数+2~3の場合と-2~3の場合では、苦労意識に大きな差が生じている。このように、3つの人的支援のあり方は妻の子育て苦労意識に大きな影響を与え

表-11 苦労低減要因×子育て苦労意識

苦労低減要因数	苦労意識			計
	非常に苦労	少し苦労	特に苦労なし	
+3	0	5	10	15
~+2	0.0	33.3	66.7	100.0
+1	0	18	32	50
	0.0	36.0	64.0	100.0
±0	2	23	29	54
	3.7	42.6	53.7	100.0
-1	3	19	24	46
	6.5	41.3	52.2	100.0
-2	2	15	10	27
~-3	7.4	55.6	37.0	100.0
合計	7	80	105	192
	3.6	41.7	54.7	100.0

注1) 苦労低減要因とは夫の協力度(23点以上/15点以下)、母親の居住地(同居・近所/遠距離・死亡)、ママ友との交流度(頻繁/殆どなし)の合算数とし、それぞれ()内の前者をプラス要因、後者をマイナス要因とした。
+3は3要因全てがプラス要因であることを示す。
注2) 上段の数値は実数、下段の数値は構成比(%)を示す。

ており、それらが重なって作用すると、大きな影響をもつと位置づけることができる。

表-10 「夫のいる世帯」における苦勞意識と要因との関係(%)

		非常に苦勞している(7)	少し苦勞している(80)	特に苦勞していない(105)
基本的条件	妻の就業状況	無職 28.6 正社員 71.4 パート	無職 32.9 正社員 29.1 パート 38.0	無職 50.5 正社員 24.8 パート 24.8
	子どもの人数	1人 71.4 2人 3人 14.3 4人 14.3 以上	1人 16.3 2人 52.5 3人 26.3 4人 5.0 以上	1人 27.6 2人 49.5 3人 21.9 4人 1.0 以上
	LDK以外の部屋数	1室 2室 28.6 3室 28.6 4室 42.9 以上	1室 12.5 2室 27.5 3室 35.0 4室 36.3 以上	1室 1.0 2室 28.8 3室 26.9 4室 43.3 以上
人的条件(人間関係)	夫の家事協力度	少ない 50.0 ふつう 33.3 多い 16.7	少ない 27.3 ふつう 33.3 多い 39.0	少ない 24.0 ふつう 39.0 多い 37.0
	母親の居住地	同居 近距離 42.9 遠方 42.9 死亡 14.3	同居 6.3 近距離 61.3 遠方 26.3 死亡 6.3	同居 8.6 近距離 57.2 遠方 31.4 死亡 1.9
	ママ友との交流	頻繁 14.3 時々 57.1 殆どなし 28.6	頻繁 20.3 時々 45.6 殆どなし 34.2	頻繁 37.3 時々 42.2 殆どなし 20.8

注1) 表頭の()内はサンプル数を示す。

注2) 「夫の家事協力度」の категорияは表-7の注で定義している夫の協力点数から、「少ない」:11~15点、「ふつう」:16~22点、「多い」:23点以上とした。

注3) 「ママ友との交流」の категорияは「頻繁」:週2~3回以上話す、「時々」:月2~3回程度話す、「殆どなし」:月1回も話さない

3-4 子育て苦労意識に影響を与える要因（まとめ）

本稿では子育て中の母親に対するアンケート調査結果から、主として子育ての苦労意識に影響を与える要因について分析してきた。分析を通して得たいくつかの知見を以下にまとめた。

1) 子育ての苦労意識

図-12 に今回の分析で用いた要因と苦労意識の関係を整理した。それぞれの要因はその発揚の仕方によって苦労増加にも逆に苦労軽減にも働く。これらの要因は単独でその効果を発揮するとは限らない。お互いにその効果を増幅したり、相殺して苦労意識に作用していると考えられる。苦労増加要因が重なると苦労意識は上昇し、苦労低減要因が重なると苦労意識は低下する。このように、多くの苦労増減要因が複雑に関係し、その結果として母親個人の子育て苦労意識を形成していると考えられる。

苦労増減要因		苦労増加(要因) ←————→ 苦労低減(要因)
基本的要因	妻の就労状況	パート ←———— 正社員 ———→ 無職
	子ども数	多い ←————→ 少ない
	LDK以外の部屋数	少ない ←————→ 多い
人的要因(人間関係)	夫の有無	いない ←————→ いる
	夫の家事分担(協力度)	少ない ←————→ 多い ※特に、なし・極めて少ない場合、苦労意識に大きく影響を及ぼす
	母親の居住地	死亡 ←— 近距離 ———→ 同居 ※特に、なし・極めて少ない場合、苦労意識に大きく影響を及ぼす
	ママ友との交流頻度	少ない ←————→ 頻繁にある
	近所の人の支援	殆どない ←————→ よくある

図-12 子育て苦労意識に影響を与える要因(まとめ)

2) 苦労意識低減の方策

子育て環境が変われば、当然苦労意識も変化する。表-13 にあげた8要因のうち、基本的要因の改善は困難である。そのうち、「LDK以外の部屋数」は改善の余地があるが、それには大きな経済的負担を伴うので、そう簡単なことではない。

一方、人的要因については「母親の居住地」を除いて、努力次第で改善できる可能性をもっている。

〈夫の家事協力〉

夫の家事分担(協力度)が少ない場合、妻の苦労意識は増大しているが、それには物理的側面と精神的側面が含まれていると考えられる。前者は子育て・家事を妻1人で担うことよる肉体的にも時間的にも厳しい状況に置かれることである。後者は夫が家事を分担してくれないことに対する不満が鬱積し、精神的ストレスとなる。夫婦で相談して協力体制を築くことが大切であるが、「夫に何か相談しても、夫が代わりに子どもに関わるという事

がないので、家庭内の不担が大きい」(自由記述)との意見もあり、その実現には根気強い努力が必要であろう。夫が家事を分担できない背景として、仕事上の制約から家事分担できない時間的問題もある。自由意見に「私は育児休暇よりも夫の普段の仕事を終えて帰宅する時間を早くしてほしいです。家族全員で夕食を平日でも食べたいです。それってぜひいたくでしょうか?」「主人は仕事が忙しく家にほとんど居ません。家族揃っての朝食、夕食を週に一度とれるかどうか。こういった家族はうちだけではないと思います。」といった強い要望が寄せられている。これは個人で解決するのは困難であり、社会的にそういう雇用条件の改善を生み出す必要があるが、そう簡単ではない。

〈ママ友〉

ママ友は同じ子育て中の友だちであり、育児に関する情報を交換したり、悩みをうちあけあったり、子どもを預かったり、時には一緒に楽しむ仲間でもある。今回の調査結果でも交流頻度と比例して苦労意識が低下している。しかし、今回の結果では約半数が月1回もしくはそれ以下しかママ友との交流をもっておらず、ママ友の効果を享受できていない。積極的にママ友との交流を行うべきである。そのことで双方が大きな利益を得るのである。ママ友がいない場合は、子育てサロンで出会えるチャンスを提供しているので、それを活用するのも一方法である。ママ友との交流は相談相手としてだけではなく、生活を一緒に楽しむ関係でもある。

表-13 に話やメール以外の交流内容を示しているが、「家を行き来する」(56.6%)、「食事やお茶をする」(25.1%)が上位にきており、ママ友との親密な交流状況をみてとることができる。

表-13 妻の就労状況×ママ友との交流内容 (%)

就労状況	食事やお茶をする	買い物に行く	映画やカラオケ	公園に行く	家を行き来する
正社員	32.6	2.3	2.3	16.3	48.8
アルバイト パート	23.8	7.9	0.0	9.5	66.7
無職	21.7	1.4	0.0	18.8	52.2
合計	25.1	4.0	0.6	14.9	56.6

注) 「話をする」「メールをする」以外の交流内容について聞いている。

〈近所の人の支援〉

近所の人による支援も重要だと考えるが、今回の調査結果では実際に支援を受けている比率は極めて少ない。これには普段からの近所づきあいを通して、信頼関係を築いていることが重要である。自由記述に緊急時に預けることのできる託児施設の要望が強く出されていたが、近所で緊急時に子供を預かってくれる関係ができれば、子育て上極めて有効である。

4. 公的支援

公的に子育て支援を行う機能がいくつか用意されているが、ここでは各自治体ごとに設置している子育て支援センターと子育てサロンと北海道が道営住宅の中で進めている道営子育て支援住宅について紹介する。

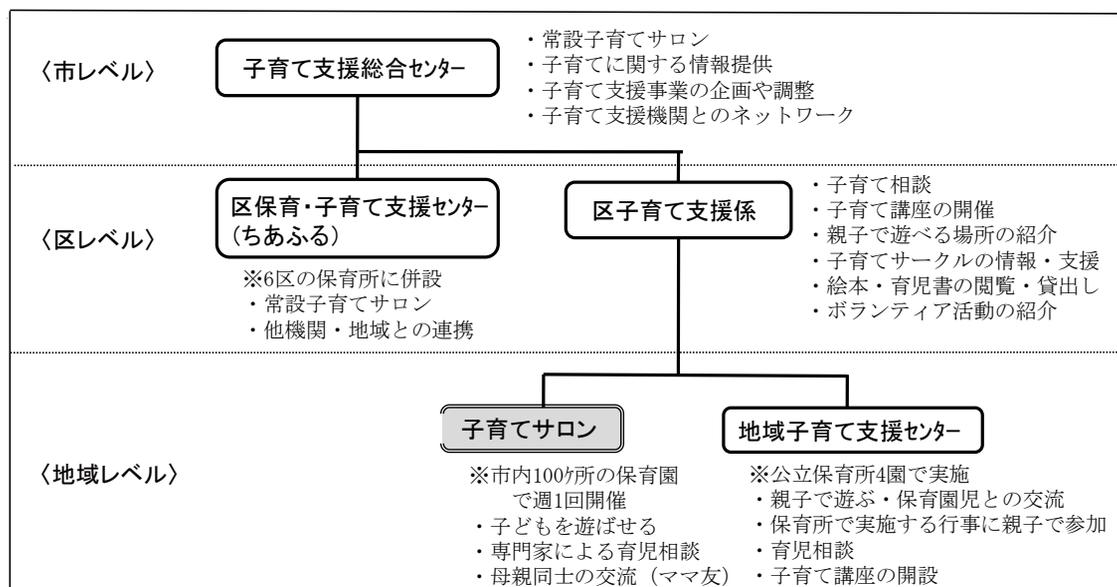
4-1 子育て支援センター

各自治体は子育て支援センター（子育て支援をコーディネートする機関）と子育てサロン（児童会館等を活用して直接母親と子どもを遊ばせる空間）をもっている。ここでは札幌市を事例として、子育て支援のしくみと内容について説明する（図-10）。

札幌市の子育て支援は3つのレベル（市レベル、区レベル、地域レベル）で連動して実施されている。図-10にそれぞれのレベルの施設と具体的な内容を記述している。ここで、若い母親が身近に出かけ利便を受けることができるのは「子育てサロン」である。これは市内に100カ所ある児童会館の空間を活用し、1週間に1度（午前中に）開催されており、親子で自由に参加できる。その内容は1)児童会館の空間・遊具・絵本等を利用して子どもを遊ばせるほか、2)母親同士の交流、3)専門家による子育て相談などである。ここで特に重要な機能は2)母親同士の交流であり、同じ子育て中の母親と知り合うことで相談相手（ママ友）を見つけることである。

問題点・課題としては、「子育てサロン」は週1回（平日の午前中）しか開催されていないために、有職の母親には利用できないこと、無職でも日常的に利用できないことがあげられる。

子育て支援総合センター（市レベル：開館時間は9:00～17:00で、12/29～1/3以外は休日でも開館している）と区保育・子育て支援センター（区レベル：開館時間は9:00～17:00で、日・祝を除く）の常設子育てサロンでは先述の「子育てサロン」の問題点を解決しているが、そこへ行くのに時間と手間が必要である。



注) 「さっぼろの子育て支援」(札幌市発行パンフレット)より作成

図-10 札幌市における子育て支援のしくみと内容

ところで、今回実施したアンケート調査結果から子育て支援センターの認知度と利用状況を表-12に示している。

表-12 妻の就労状況×子育て支援センター (%)

妻の就労状況	認知度		利用状況		
	知っていた	知らなかった	よく利用する	時々利用する	利用しない
正社員	84.6	15.4	2.3	13.6	84.1
アルバイト パート	81.4	18.6	1.8	23.2	75.0
無職	95.1	4.9	5.2	35.1	59.7
合計	87.7	12.3	3.4	26.0	70.6

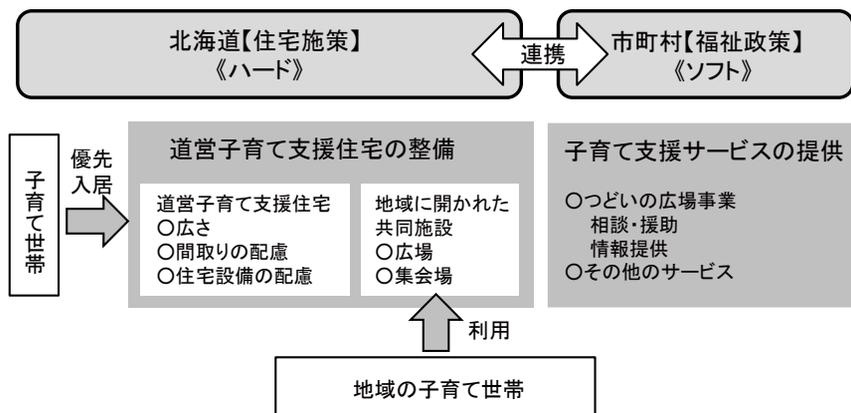
この結果、妻の就労状況に関わらず、子育て支援センターの存在は多くの母親が知っているが、利用状況は妻の就労状況で差が生じている。無職の場合は約4割が利用しているが、有職者は2割前後に大きく下がっている。これは「子育てサロン」が利用できないこと、市および区の「常設子育てサロン」を利用しに行くのに時間がかかるなどの背景に依っていると考えられる。

4-1 道営子育て支援住宅

北海道は平成16年4月に「北海道公営住宅等安心居住推進方針」を策定し、その一環として平成17年度より「子育て支援住宅」の供給を開始している。これは住宅施策と福祉施策が密接な連携を図りながら、住宅に困窮する子育て世帯に対して、子育てに配慮した仕様を備えた良質な住宅を供給し、集会所や広場を整備するとともに、これらの施設を活用し、子育て世帯の交流や相談・援助など子育て支援サービスを提供するものであり、その概要を図-11に示している。

具体的には、北海道と市町村とが連携し、北海道が子育てに配慮した公営住宅・広場・集会所（ハード）を供給し、市町村がその空間を活用して子育て相談・援助や情報提供など（ソフト）の支援サービスを実施するしくみである。これまでに根室市「であえーる明治団地」（平成17年度）を初めとして深川市、紋別市、函館市、登別市、美唄市、網走市の7市で計78戸の道営子育て支援住宅が建設・供給されている。道営住宅以外でも、足寄町、東川町の町営住宅にも17戸が子育て支援住宅として組み込まれている。

道営子育て支援住宅の入居要件は就学前親族がいること、世帯収入が26.8万円／月を超えないこと、住宅に困窮していることであり、入居期限が設けられている。



注) 北海道子育て支援住宅推進方針《概要版》より作成

図-11 道営子育て支援住宅概念図

おわりに

私の子ども時代（昭和20年代）には、当時京都府舞鶴市に住んでいたが、子どもは地域の人々に支えられて育った。夏休みには1時間ほど歩いて海に行き、連日海水浴を楽しんだが、地域の大人たちが交代で連れて行き、子ども達の世話をしてくれた。8月20日過ぎの2日間、「地藏盆」という子どものイベントがあり、町内に設置されているお地藏さんを女の子が川で洗い、絵の具で化粧し、祭壇に飾った。男の子は長老に連れられて山に行き、竹を伐り、それを担いで町内まで帰り、それを立ててちょうちんを吊した。その周りで子ども同士で遊びや踊りを楽しんだ。主婦の人達が総出で炊き出しを行い、ご馳走をよばれたが、60年が経過した今日でも、楽しい思い出として鮮明に覚えている。日常的にも自由に他の家に上がり込んで遊んでいたし、悪いことをすると近所のおじさんによく怒られたものである。

また、男の子ども同士の遊び集団（幼稚園～小学6年生）があり、集団で山へ行ったり川へ行ったりして遊んだ。その中で、先輩から後輩へ遊びの伝達、集団の規律性（上の子は下のこの面倒を見る、下の子は上の子に従う）など多くのことを学んだが、いわば“子ども遊びコミュニティ”が形成されていたのである。

今日ではすっかり子育て環境が変化してしまっている。

ところで、修士の前田さんと釧路町の遠矢コレクティブハウジングを2回にわたって調査した（文献3）。その中で極めて興味深い事実を確認した。当初の供給目的はシルバーハウジングの質的向上（高齢者同士の支え合い）であったが、生活の展開とともに、高齢者が要となり居住者同士（高齢者－高齢者、高齢者－若い世代、高齢者－子ども）の交流が活発に行われるようになったことである。その過程で、高齢者は子ども達と極めて親しい関係を築き、子どもへの声かけ、見守りのとどまらず、母親がいないときの預かりなどに加えて、若い母親の相談にのる……などまさに「子育て支援」を実行している様子を見聞きしてきた。遠矢コレクティブハウジングでは、期せずして子育て支援のしくみが生み出されたのである。これを実現した重要な背景として、入居前に数回実行された模擬授業（ワークショップや交流会など）がある。これを通して、入居前から入居者同士が顔見知りの関係になっていることに加えて、コレクティブハウジングの住まい方を共有していることである。さらに、入居後には居住者間の交流を促進するためのハードなしかけ（共有空間としての「縁側」や菜園）とソフトなしかけ（各種行事）が機能している。そのような状況の中で、高齢者は時間的余裕と体力的余裕の有利な条件を活かして、他世代や子どもたちに積極的に働きかけており、そのことが若い世代や子ども達に喜ばれていると同時に、彼等自身の存在感や生きがいともなっている。

このような状況を“住まい”を越えて、地域で創出できないかと考えている。その実現はそう簡単なことではないが、1)地域の人々の間で信頼関係を醸成すること、2)異世代間の積極的な交流を促進すること、3)地域で支え合う生活思想を共有することなどが重要な課題であろう。子育てを若い母親にだけ押しつけるのではなく、子育て（支援）コミュニティを形成することが目標である。

〈参考文献〉

- 1) 小伊藤亜希子、室崎育子編「子どもが育つ生活空間をつくる」かもがわ出版、2009年8月
- 2) 垣内国光・櫻谷真理子編著「子育て支援の現在－豊かな子育てコミュニティの形成を目指して－」ミネルヴァ書房、2002年8月
- 3) 前田光也、大垣直明「鉦路町遠矢コレクティブハウジングに関する研究－鉦路町都市建設課と居住者へのヒアリング調査の分析－」藤女子大学QOL研究所紀要、第6巻第1号、2011年3月